

## 2022年7月24日 佐土原キリスト教会 礼拝説教

聖書箇所：マルコ福音書9章30～37節

説教題：だれが偉いか

ある年の大晦日、恒例の歌番組を見ていて、印象深く記憶に残った場面があります。番組の終わりの方で「きれいな地球の写真」が映し出されて、それに合わせて司会者が「人間はアホやから競い合うけど、人間同士で争っていないで、この大切な地球を大事にしなければならん」という話をしました。あのアポロ計画で重要な役割を果たしたリーダーが言ったそうです。「月に行って分かったことは、月は人類を簡単には寄せ付けられない星だった。今、私達が暮らせるところは地球しかない。この星を大切にしなければならない」。そういう言葉だったと思います。私は、歌番組の司会者の言葉に「良いことを言っているな。競い合う—(覇権を争う)—ところに問題の根があるんだよな」と思って聞いていました。そして最後に「お互いに競い合うのではなくて、誰もが大切な1人なのだ」という歌が歌われました。「良いエンディングだったな」と思った途端、司会者が大きな声で言いました。「では赤組、白組、どちらが勝ったのでしょうか!」「アララッ。結局、競い合っていたのか」と思わされたことでした。

人の上に立ちたい、下に立ちたくはない、低く見られたくはない、それは、私達が生まれながらに持っているもののように思います。「低く見られる」と、人は怒ります。「人が2人いたら政治が始まる」と言う言葉も聞いたことがあります。「どちらが上だとか下だとか、どちらがリードをして、どちらが従うのか…」とか、そういうことが始まるのでしょうか。だから「競い合うのは良くない」と言いたいのですが、でもイエスは、この個所で「競い合うな」とは言われない。では、何を教えておられるのか。この個所はキリスト者の生き方の基本的な姿勢を教えてくれる個所です。

### テーマ…偉く生きるとは

この個所は2つの部分から出来ています。30～32節は「イエスがご自身の死と復活を予告される個所」であり、33～37節は『誰が一番偉いか』についての議論(教え)がなされている個所です。

30節に「一行はそこを去って、ガリラヤを通過して行った」(30)とあります。「イエスの変貌」、それに続く「悪霊に憑かれた子供の癒し」、それらの出来事が起こったガリラヤの北の地域を去って、ガリラヤを通過して…ということですが、「ガリラヤを通過して」どこへ行こうとしておられるのでしょうか。「マルコ福音書」は、いよいよイエス様一行が、十字架の待つエルサレムへ向かおうとしておられる—(少なくとも意識の上では既にイエスはエルサレムを向いておられる)、そのことをここで告げます。エルサレム—(ご自分の十字架)—に思いを向けられたイエスは、「人に知られたくないと思われた」(30)とあります。それまでは、多くの人々に伝道し、癒しをしておられました。でもエルサレムに向かう歩みを始められたイエス様は、「エルサレムに向かう途中で伝道をしながら…」ということをして、主な関心事とされなくなります。なぜかというと、31節に「それは、イエスは弟子たちを教えて…話しておられたからである」(31)とありますが、イエスは、弟子達に教えること—(弟子達を訓練すること)、それを中心的な関心事とされるのです。イエス様は「ご自分の十字架、復活、昇天」の後、地に残ってイエス様のことを正しく語り伝えて行く人々を必要とされました。そのために、弟子達を正しく訓練しようとされたのです。

そして言われます。「…人の子は人々の手に引き渡され、彼らはこれを殺す。しかし、殺されて、三日の後に、人の子はよみがえる…」(31)。2回目の「受難予告」です。8章で1回目の「受難予告」をされた時には、「人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちに捨てられ、殺され、三日の後によみがえらなければならない」と(8:31)と教えられました。しかしここでは「長

老、祭司長、律法学者たちに…」ではなくて「人々の手に…」と言われます。イエス様を十字架に掛けてしまうのは、ユダヤ社会のリーダー達だけではない。「人々」なのです。多くの人がイエス様を殺して行く。そして、それはまた決して当時のユダヤ人だけのことではないことを、私達は知っています。イエス様は、全ての人の罪のために死のうとしておられました。そこには私達の罪も含まれます。水野源三さん（生涯、瞬きしか出来ず、そのお身体で神を讃美する素晴らしい詩を書き続けた詩人）が次のような詩を書いています。「ナザレのイエスを十字架にかけよと、要求した人、許可した人、執行した人、それらの人の中に、私がいる」（水野源三）。「水野さんはこの町の宝です」と言われた方が、そう言われたのです。私達も、自分を除外することは出来ない。いや、除外してはいけない。除外したら、自分はイエス様の十字架と関係がなくなります。そして実際、私達の罪が見えるところがあるのです。

カペナウムに着いた時、イエスは弟子達に聞かれます。「道で何を論じていたのですか」(33)。彼らは、イエス様がメシア(神の救い主/キリスト)であることは信じていました。それは「イエス様がその力をもってローマを蹴散らし、ダビデ王の時代のように、再びイスラエルを復興されることだ」と思っていました。そして「その時には、自分達はイエス様の側近として高い地位に就くことになる、その時、どういう順番でその地位に就くことになるのか」、この時、弟子達は、そんなことを話していたのだらうと思います。無邪気な感じがします。では、私達はどうか、そういう思いがないか、というと、決してそうではないのではないのでしょうか。私達は、心の中で「人と自分を比べる」ということをします。そして誰かを自分よりも下に置いて優越感を持ったり、逆に自分を誰かの下に見て劣等感を持ったり、僻んだりするのではないのでしょうか。彼らは、私達以上に正直な人達だったかも知れません。私達も「人と比べることが素晴らしい」とは思わない。神学校の入学式で、学長が「人と比べると、優越感か劣等感しか生まれないから、人と比べないようにして下さい」と言われたのを覚えています。弟子達も自分達のやっていたことが、イエス様の御心にそぐわないことは感じています。だからイエス様に答えることが出来なかったのです。しかし彼らの問題は、「誰が一番か」と論じていたことではありません。イエス様は「いちばん先になりたい者は…」(35 新共同訳)と言われます。「一番先になる」という考え方自体を否定してはおられないのです。問題は、『『偉い』』ということがどういうことなのか、それを彼らが理解していなかったということです。

35 節に「イエスはおすわりになり…」(35)とあります。これは当時のラビが教えをする時の正式な姿勢です。イエス様は、大切なことを語ろうとされるのです。『『偉い』』とはどういうことか」ということです。それが「だれでも人の先に立ちたいと思うなら、みなものしがりとなり、みなに仕える者となりなさい」(35)という教えです。「誰も先頭に立つてはいけない」と言われたのではありません。「この中で皆の先頭に立ちたい者がいるか。それなら先頭に立てる秘訣を教えます」と言われたのです。そして「それは、人の一番後ろに立って、皆に仕えることです」と言われたのです。なぜ「一番後ろに立つこと」が、「皆に仕える」ことが、偉いのでしょうか。

人間は、全ての被造物の中で特別なものとして造られた存在です。人間の創造を語る「創世記」は、「アダムとエバが罪を犯した」という 3 章から始まるものではありません。それは重要な出来事です。信仰理解の核心です。しかしそれでも、「創世記」は、『『神が人をご自身に似せて造られ』、『非常に良かった』』と言われた 1 章から始まるのです。{「『さあ人を造ろう。われわれのかたちとして、われわれに似せて』…神は人をご自身のかたちとして創造された。神のかたちとして彼を創造し、男と女とに彼らを創造された…見よ。それは非常に良かった」(創世記 1:26~31)}。人間は神に似せて造られたのです。素晴らしいことです。人の「偉さ」、それは「神に似ている」という

ことです。逆に言うと、「神に似る時に、私達は『一番素晴らしく、偉く在れる』ようになっているのです」。

では、その神は、どのように生きられたのか。人となった神である主イエスは、どのように生きられたのでしょうか。「ヨハネ福音書 13 章」の「最後の晩餐」の記事において、イエス様は弟子達の足を洗っておられます。「足を洗う」というのは、当時、奴隷の仕事でした。砂埃の道を歩いて来て家に入る時、その家の奴隷が主人やお客の足を洗ったのです。イエス様と弟子達が「最後の晩餐」を始める時、弟子達は誰も奴隷の仕事をしたくありませんでした。自分を他の者よりも低くすることが出来なかったのです。だから彼らは、足を洗わないままで食事を始めたのです。そこでイエスご自身が「…上着を脱ぎ、手ぬぐいを取って腰にまとわれ…それから、たらいに水をくんで弟子たちの足を洗い、腰にまとった手ぬぐいでふき始められた」(ヨハネ 13:4~5)のです。この後すぐに、弟子達はイエス様を裏切ります。イエス様は、それを知っておられました。それでもその弟子達よりも低い所に立って、彼らに仕えられたのです。そして言われました。「主であり師であるこのわたしが、あなたがたの足を洗ったのですから、あなたがたもまた互いに足を洗い合うべきです—(僕となって仕え合うべきです)—あなたがたがこれらのことを知っているのなら、それを行なうときに、あなたがたは祝福されるのです」(ヨハネ 13:14~17)。「あなた方は祝福されるのです」。ここに、教会が、私達の様々な人間関係が、いや、人生そのものが祝福される法則があることを、私達は信仰によって信じます。イエス様は言われます。「神によって生かされている命を本当に生きようとするのであれば…すべての人の後に立ち、一番低い所に立って人に仕えることを学びなさい」。「一番低い所に立つ」ということは、私達を造り、支え、生かしておられる神様、主イエス様と似ることなのです。それこそ、神の目に、信仰の基準において「偉く」生きることです。だから「みなに仕える者となりなさい」(35)と言われるのです。そこに真の「偉さ」が現れるのではないのでしょうか。逆に言うと「それが出来ないところに私達の罪—(人間社会の罪)—が現れる」のではないのでしょうか。聖書が言う「罪」とは、「的外れな生き方をしている」ということです。私達の生き方は、「本来あるべき姿」からの外的を外しているのではないのでしょうか。私達は、神に頂いた「偉さ、素晴らしさ」を正しく生きているのでしょうか。

しかしこの箇所は、私達の信仰をさらに先に導きます。主は「低く立って人に仕えることを学びなさい」と言われました。誰に仕えるのでしょうか。その時にイエス様は、1 人の子を真中に立たせて、彼らに言われたのです。「だれでも、このような幼子のひとり、わたしの名のゆえに受け入れるならば、わたしを受け入れるのです…」(37)。舞台はカペナウムです。カペナウムで「家」と言われるのは、ペテロの家だったでしょうから、この子は「ペテロの子」だったかも知れません。いずれにしても「誰に仕えるのか」、「子供を受け入れ、子供に仕えなさい」と言われるのです。「みなに仕える者となりなさい」(35)、それは「小さき者を受け入れ、小さき者に仕えなさい」と言い換えても良いかも知れません。子供は可愛い—(可愛かった)。でも、だんだん難しくなります。腹が立つこともあるでしょう。その時、私達は「子供を受け入れることがイエス様を受け入れること」だとは思わないでしょう。しかし「みなに仕える者となりなさい」(35)、これは具体的なことです。目の前にいる「1 人の子供」に仕えること、目の前にいる隣人を愛し、仕えることなのです。

しかし、小さき人にどう接するかを語るために、なぜ罪のことを考えるのでしょうか。それは、自分の生き方が間違っている、自分の生き方は恐らく外的を外している、そのことを本当に思わなかったら、私達は本音の部分で生き方を変えようとはしないからです。本当の意味で祝福の生き方をしようとはしないからです。罪を問うことは、イエス様の十字架を問うことです。それは、十字架で赦された自分を問うことです。

皆さんは、ご自分のことをどのように思っておられるでしょうか。私は、最近やたらと昔の夢を見ます。あるいは、フト昔のことが思い出されます。どれも本当に醜い、恥ずかしい姿の自分です。そんな私が、何を立つ瀬に出来るのか。それは「ただ主の十字架の故に全てが赦されている」という一点です。こんな自分が、それでも、主が死ぬほど、いや死んだほど愛して下さり、赦して下さった。ただそのことを根拠に、私は立てる気がするのです。そしてそのことの感謝があるから、そして私のために死んで下さった方の言葉は真実であると、そこに祝福があると信じるから、「これからは、低いところに立つ生き方をして行きたい」と思えるのです。

先日、保健師の方から改めて運動を勧められました。こう言われるのです。「『運動』って『運を動かす』と書くじゃないですか。散歩だけでも、足の裏にあるツボを刺激するのでとても良いのです。「上手いことを言われるな」と思って、今、出来るだけ、朝の散歩をするようにしています。この説教のことをあれこれ考えながら、久峰公園の競技場を歩いている時、フト、こんな考えに導かれました。「これまで、人に迷惑をかけたり、醜い思いで人付き合いをしたり、受け持ちの子ども達にも辛く当たったり、ロクな生き方はして来なかったな」、そのように残念な、恥ずかしい、情けない思いになった時、その思いは「こんな者が良くここまで生かされて来たな。神様に感謝だな」という思いに変えられました。そして、さらに「せめてこれからは、どんな小さなことでも良い、人の役に立つ生き方、人を愛する生き方、人に仕える生き方をして行きたい」と、そんなように導かれたのです。そして、イエス様の教えの真実が思われました。自分の恥かしい経験ですが、しかしそのように、自分の罪を思う時、主への感謝が湧き、それが新しい生き方への動機づけになるのではないのでしょうか。

イエス様は、私達のために死んで、私達に永遠の命を下さいました。その方が、私達に真実でないこと、祝福に至らないことを教えて下さるはずがありません。永遠の観点から、私達を最善に導いて下さろうとしているのです。聖書に「ついには、あなたをしあわせにするためであった」(申命記 8:16)とあります。私達の人生は、そこに向かって導かれて行きます。そこまでの私達の生きる生き方は、イエス様を見上げ、仕える生き方を選び、隣人を受け入れて行く生き方をして行くことではないのでしょうか。その全てを、イエス様は「私にしてくれた」と受け止めていて下さるのです。イエス様に従い生きるなら、やがて人生を終える時、終えた後、私達は、自分の人生を、恥ずかしさをもってではなく、満足をもって振り返ることが出来るのではないのでしょうか。そしてそこで、イエス様の御声を聞くことができることでしょうか。「よくやった。良い忠実なしもべだ…主人の喜びをともに喜んでくれ」(マタイ 25:21)。祈ります。